《論文》

リービ英雄論 ―― なぜ日本語を選び執筆するのか ――

田村　聡実　TAMURA, Satomi

初めに

リービ英雄は本名イアン・ヒデオ・リービ（Ian Hideo Levy）といい、一九五〇年、アメリカに生まれた日本語で執筆する小説家であり、越境作家と呼ばれている。越境作家という言葉は、本論文では、生まれた国の言語、即ち母語以外の言語を使用して小説やエッセイ等を執筆している者に対して使うこととする。

本論文は、彼が「なぜ日本語を選び、執筆するのか」という疑問を解決するために検証を行う。リービ英雄を研究した論文や本人のエッセイだけではなく、彼の小説も扱い、その内容を比較検討することで、先の問いについて考察したい。

第一章　リービ英雄について

まず、リービ英雄の生い立ちについて紹介する。彼は多くの移住を経験し、複数の言語環境に身を置いたことが特徴的である。ユダヤ系の父親とポーランド系の母親の長男としてアメリカ国籍をもつ彼は、幼少時代から父親の職場の都合、アジア各地とアメリカの間を転々と移住する。更に、両親の離婚により少年期は母と弟と帰国しアメリカワシントンDCの郊外の町で育つが、十代半ばごろは駐日アメリカ領事を勤めていた父親のいる横浜へと留学し、上海系中国人と再婚した父親と、異母妹などとの新しい家族生活を始める。このように、幼少期から複雑な言語環境にさらされてきたリービ英雄だが、特に、思春期に日本にいた経験は、リービ英雄の人生や作家としての道程にとって大きな転換点となるのである。

なぜなら、日本（横浜）での暮らしで、彼は家の中では英語、上海語、北京語の世界でありながら、外へ出ると日本語の世界に囲まれるという、奇妙な言語環境にいることに意識的になったためである。そして、このころから本格的に日本人と接触し、日本語を習い、日本の文学と文化に魅了され始め、やがて日本文学研究者を志すことになる。リービ英雄はその後、一九六〇年代の終わりから一九八〇年代までの二〇年間、日本

とアメリカの間を行ったり来たりする生活をし、それらの体験は彼の作品の下敷きになっていく[1]。

次に、リービ英雄が日本語で執筆する試みの特異性について確認したい。笹沼俊暁氏は、戦後の冷戦体制下に形成されたアメリカにおける日本学の植民地主義を脱構築しようとするものだったとみており、次のように説明している。

> 日本文学を理解し、記述し、紹介するのではなく、自ら日本文学を構成する一員となることは、日本学が前提とする「日本」の「内」「外」の枠組そのものを無効化してしまう行為である。翻訳を通さず日本語で創作活動をし、日本の文学者になるということは、アメリカの学術制度の枠内における「日本理解」の蓄積にはなんら寄与しないのであり、また観察・理解の対象であるべきはずの客体に観察主体が全面的に介入してしまう行為なのである。（略）
>
> 相対的に力の弱い集団や個人が、力の強い社会や言語の枠組の中で自らの声を発していくという行為は、もちろん大きな意味のあるものだが、時にはマジョリティーの側を再活性化させより強大にしていく契機ともなり、またある意味で現代の国際化・グローバル化時代における功利性や合理性の追求とも合致する。それに対して、マジョリティーの側に属する者がマイノリティーとなる行為は、多くの場合、そうした見返りが期待できず、よりいっそうの高い倫理性が要求されることになる。[2]

このように、リービ英雄は、周辺状況からして存在しにくいと考えられるが故に、日本の文壇での意義や、文学を目指した理由を問われ続けている存在なのである。

第二章　リービ英雄について

リービ英雄が「なぜ日本語を選び、執筆するのか」という疑問は、実は作家デビューからずっと問われつづけてきたにも関わらず、その疑問に対して明確な理由はいまだ提出されていないといえる。この章では、リービ英雄の日本・日本文学観について、これまでの研究と本人の発言をみていく。

①日本語の感覚的魅力・日本語への共感

リービ英雄は、なぜ「母国語」である英語ではなく、「外国語」である日本語で小説を書いたのか、という質問に対して、『日本語の勝利』で次のように述べている。（傍線は引用者による、以下同様）

> 日本語は美しい、（略）日本語で書きたくなるのは当然じゃないか（略）ぼくが日本語で書く「必然性」には個人的で、経験的で、主観的な要素が大きい

これはデビュー作『星条旗の聞こえない部屋』を出したばかりの段階での答えである。率直に、自分の感性の問題であるから、理論的な説明が難しいとしている。しかし〈ぼくは、日本語が自分の気質に合っているという意味では最初から自然だった。〉（『日本語の勝利』）とも答えているように、本人としては、説明ができないが自然なことだったという。そしてまた、〈中心とか周辺ということに無頓着に、もっと感性のレベル、

あるいは人間関係のレベルで日本語に入った。〉（『我的日本語』）と感性のレベルを言い換えて、人間関係が関わっているともいう。

また感覚的に魅かれるものの具体例としては、話し言葉ではなく書き言葉であり、〈「混じり文」〉であると述べている（『我的日本語』）。確かに、〈「混じり文」〉は日本語独自の特徴の一つとしてあげられるだろう。そしてその〈「混じり文」〉に魅かれたのであるなら、日本語を選択する要因となるだろう。

以上のように、リービ英雄は自身の感性、感覚を、日本語を選んだ理由として挙げているが、中でもそれは二つに分けられ、人間関係を要因としているものと、日本語の書き言葉そのものの芸術的美しさを要因としているものがあったということが分かった。

②日本・日本語の性質への興味・批判

リービ英雄は日本語と触れ合ううちに、日本という国の性質が壁になる。『日本語の勝利』で次のように述べている。

> 小説に限らず日本語で書くもう一つの理由がある。ごく単純にいえば、書けないと思われるから書く、ということだ。（略）日本語で書くという行為が、国籍＝人種＝言語＝文化という常識、左翼、右翼、モダン、ポスト・モダンを問わず、依然として日本の知識人を宰領している常識に対する小さな反抗になればいい、という気持ちも抱いている。

リービ英雄は、日本語を書くことによって内側に入ろうとしたが、日本内部の固定観念に触れて、自分が白人であるが故に生まれる偏見を感じたのである。それは差別と呼べるようなものであり、それをどうやって突破するのかを考えているのだという（『越境の声』）。

敗戦後の日本は、自分達の上に立っているものの存在を感じてきた。リービ英雄はその存在と同質として日本人から見られ、偏見を受け続けて生きていた。その体験を具体的に説明しているのが、次の座談会での発言である。

> 当時、正直に言えば、日本人になりたいという気持ちがものすごくあった。（略）多分フランスへいってフランス人になろうとしたり、中国へ行って中国人になりたいというと、すごく歓迎される。それが日本になかった。生まれはちがうのだけれど、感性のレベルではここまで一体化してしまったのに、なんで認めてくれないのかという屈折のなかで、せめて言葉のなかで日本人になることはできるかもしれないと思った。(3)

このように、日本に属したいと切実に願った時から、差別に抗い日本の性質の批判を行うことが、長年に渡って日本語を選択し続け、執筆する理由として加わるのである。

③文学的意義

さらに、『日本語の勝利』では、次のような説明がされている。

> 西洋文化からドロップ・アウトして、絶えず日本の内と外の見えない境界線にさすらって生きる人間のよろこびとみじめさを物語につづるのは、日本語で小説を書く十分な理由にならないだろうか。

アメリカ人である自分が、日本語／英語、日本／アメリカの対立構造を乗り越え、日本へと越境する行動そのものに、小説を書く価値を見出し、文学界での自己の存在意義を見つけ出しているのである。

また、日本語で書くのは、〈もし英語で書いたならば、それは日本語の小説の英訳にすぎない。だから最初から原作を書いたほうがいい、という理由が大きかった。〉（『日本語を書く部屋』）ともいい、ある国での体験を文章表現するのにあたっては、その国の言語を使用することを重視している彼にとって、日本語を使用することにこだわりを持ったことも理由として挙げられている。

以上のように大きく三つ分けられる理由は、時系列となって繋がっていく。順に説明する。

リービ英雄は、十七歳の時に日本に渡り、日本語に興味を持ち、文学作品を読んで、日本に対する共感を増す。そして十八歳でアメリカに戻り大学・大学院で勉強し、日本文学研究者となり、二十歳から徐々に日本文学の翻訳も行うようになる。そして三十七歳でようやく小説家へと転身したのである。このような日本・日本語との関わり方の節目で、日本語に対する気持ちの変化が見られるのである。

それは、最初に日本語に興味を持ち始めた思春期の十七歳の時はまだ〈感覚的な関心〉しか持っていなかったのが、日本語と触れ合うだけでは、なんの形にもならないというところから、研究という形で日本語に深く踏み入り、そこからさらに翻訳家という形に一端落ち着くのである。しかし、その形にも、〈人の手伝いをしている感じ〉でコンプレックスを持っていた[4]。そして、ある時、中上健次から日本語で小説を書くよう勧められ、小説家に転身するのである。また、二十代で日本文学を研究し、学者として論文を発表していた当時の気持ちを『アイデンティティーズ』で次のように述べている。ある白人の青年から、将来日本人に日本語を教えるような仕事がしたいと打ち明けられた時の心情である。

> ぼくも二十代のとき、そのような「当然」な野心があったことを思い出した。しかし、そんなことは不可能だった。これからの日本では不可能か分からないが……。
>
> （略）
>
> 学者であった頃の自分の「野心」の小ささを思い出して、はずかしくなった。小さな「野心」をほとんどのけられて、そのこと自体がいつの間にかバカバカしくなったから、自分で日本語を書きはじめたのかも知れない。

ここにいう「野心」とは、「日本人に日本文学を教えるような仕事をしたい」という部分にかかる。この引用文からもリービ英雄の日本語あるいは日本に対する意識が、歳を追って変化していることが分かる。日本語に興味を持ち追いかけ始めた時と、日本語で小説を書き始めた時は日本・日本語に対する気持ちは別なのだ。

実際、時期による変化という指摘は、宮田文久氏によってもされており、リービ英雄の生い立ちを三つの時期に分けて論じている[5]。

これらのことから考えうることは、次のようなことである。一つ目の理由の、日本語への感覚的な共感、というのは、リービ英雄が日本語に触れて考えた最初の動機である。二つ目の理由の、日本語の性質への興

味と批判的立場を取るという理由は、リービ英雄が日本へと馴染んでいこうとした時にみられた、日本側からの拒否と、アメリカ側からの嘲笑が動機である。そして最後のリービ英雄の日本文学界、あるいは世界の文学界における立場での有意義さという理由は、執筆活動していくうちに、周囲からの評価などにより固まっていった動機である。このように一つ目から二つ目、三つ目と次第に理由が関連して重層化していったと考えられる。

続いて、先行研究の論及を検証していこう。最初に、リービ英雄のデビュー作である「星条旗の聞こえない部屋」についての小島信夫、三木卓、川村湊「創作合評　星条旗の聞こえない部屋」からその理由についてみていくことにする。

三木　なぜリービ英雄さんがこれだけ上手に書けるほど日本語を学び、日本の文化を学んで、こういうふうに日本に執着して日本語の小説を書くに至っているのかというところは、僕は少なくともこの小説からではよく分からないんです。(6)

デビュー作品発表した当初から、リービ自身の状況や事情が着目されているが、三木氏は、この小説からだけでは、リービ英雄の日本・日本語の選択理由が〈分からない〉と評されている。また川村氏は〈父親への反感が、彼が日本文化の中に入ってくる最大の契機になったというんでは、それだけじゃちょっと物足りない〉と述べている。リービ英雄の理由は、この当時ははっきりとした答えがない状態といえるだろう。

続いて、同じく小説「天安門」が発表されて、それに対しての田久保英夫、江藤淳、富岡幸一郎「創作合評　天安門」から理由を見ていく。

江藤　やはり日本語という言葉が、片仮名があったり、漢字があったり、合切袋みたいにできている言葉だからではないか。（略）この人の中には、日本に対する敬意があるかどうかわからないけれども、日本語という言語のフレキシビリティーに対しては本物の敬意があると思う。(7)

一九八七年四月での考察よりも、小説内容からいったん離れ、日本文学の特徴を考えてからリービへと引きつけていることが分かる。

しかし、次の絓秀実、川村湊、大杉重男「創作合評　満州エクスプレス」では、絓氏は小説内容から、リービの内面的理由にも着目している。

絓　ぼくはリービさんという人はジャパノロジストとしては決して新しいタイプではなく、キーンとかサイデンステッカーの系譜上にある人だと思うんですね。（略）強い父親（アメリカ？）に敗退してスネた子供が、同じようにアメリカに敗退した日本に対して、似た者同士といった共感を抱いていくタイプですね。

（略）リービさんの面白いところは、それを批評や研究レベルから、小説において、「かれ」と日本なりアジアとの関係は、キーンやサイデンステッカーが論理の上で隠ぺいしていたことを露呈させちゃっているんだと思う。リービさんの文体は、だからポストコロニアリティーというよりも、もっとなまなましいものになっちゃっているとは言える。その批評性のなさとなまなましい共

感というか愛情が、リービさんの両義性ではないか。(8)

確かに、リービ英雄の作品の中には父親に対する反感というものは、繰り返し論じられてきた。絓氏はそこに着目して、その父親への反感から流れていった気持ちが、日本への〈なまなましい共感〉、愛情へと変化し、その愛情が、彼の作品における、本当は論理的に詰めるべきところに踏み込めない弱さに繋がるのではないか、と指摘している。

次に紹介するリービ英雄らによる座談会での西部邁氏の発言は、その〈なまなましい共感〉について深く踏み込んだものとみられる。

西部　リービさんは先ほどご自分に私小説家的な位置づけをなされていたし、（略）リービさんの小説を読ませていただいて思ったのですが、領事館長さんであられたお父様との関係にしろ、あるいは体に障害をもたれている弟さんとの関係にしろ、普通に考えれば、心理的に非常に複雑かつ密度の高い小さな空間におられたと受け取りました。

そのことにリービさん自身がどう対応するか、あるいはどう表現するかとなったとき、私生活があまりにも複雑、微妙を極めているので、普通使っている母国語を使ったときには、私的世界という対象と自分の間が母国語で充実しすぎて生々しいのではないか。(9)

これに対してリービ英雄は〈自分の精神分析はなかなかできない。かといって人にやってもらいたいとはおもわないけれども〉と返して濁している。ここでの着目点は複雑な私生活が、母語で表現することを避けさせているという考察と、その複雑な私生活というのが、父親との関係ばかりでなく、障害者である弟との関係にまで言及されており、〈なまなましい共感〉を一段深く考察していることである。

再び創作合評に戻り、三木卓、久間十義、奥泉光「創作合評　蚊と蝿のダンス」を見てみる。尚、ここでの〈原体験〉とは、元は日本人が住んでいた台湾の家で過ごした経験のことを指す。

三木　彼がなぜ日本語を選んだのかということについてはまだよくわからないけれども、しかし、幼いときにそういう原体験を持ったことが、少なくとも彼をアメリカに対して距離をとらせている一因ではないだろうかと思った。(10)

「星条旗の聞こえない部屋」の評論から二十四年経っての評論であるが、三木氏の「なぜ日本語か」という疑問は続いている。しかし、「蚊と蝿のダンス」より、原体験が〈アメリカに対して距離をとらせる一因〉、つまり日本語の選択理由の要因として挙げていることが読み取れる。この原体験は、父親に屈する思春期よりも前の幼少期であり、父親との軋轢が生まれたことよりも前に、リービ英雄が日本に魅かれる要因のひとつを考察しているところが新しい。

笹沼氏は、なぜ日本語なのかという疑問に対する本人の回答の他にも、リービ英雄が文壇に登場した時代背景を考慮した上で、創作合評での絓秀実氏の評言を、正鵠を射ているとし、〈マイジョリティーの世界に住む人が、相対的なマイノリティーの空間に向かう際〉の〈マジョリティー

の世界におけるなんらかの挫折や敗北がその背景となっている〉メカニズムに関して、リービ英雄の父親の対立について触れ、〈単なる審美主義や主観主義から来るものではなく、社会的な合理性や目的性、功利性に還元できない、あるいはそれに抗う彼の個人的な批評性や倫理性を表したものとして理解すべきと思われる。〉とまとめ、彼の〈父との対立〉が背景としてあるためとしている[11]。

フェイ・クリーマン氏は、やや停滞ぎみだった日本文学が、新たな日本語文学として、世界文学としての可能性と方向性を示すことになるのも、リービ英雄のような作家の活躍によると述べている。そして、〈西洋語優位にたいする作家の青少年の直感的な疑念こそ、リービが日本語を選択した理由のひとつ〉だとして、彼が日本語に価値を置いた理由を述べている[12]。

宮田氏は、リービ英雄が日本語で執筆したことは、日本語の性質批判であるとともに、リービ英雄が執筆することで新たな構造（アメリカ、日本、中国の三国に渡る作品）が作られることで執筆の意義が成り立っているという。また〈「越境者」としての背景から、私小説的であることがそのまま「越境文学」となっていくリービ英雄の逆説的な立ち位置がここで浮かび上がってくる。〉と私小説を執筆することで、リービ英雄の立場が文学界の構造上有効になることを指摘している[13]。

以上の通り、基本的に先行研究は、「なぜ日本語か」という疑問に対し、リービ英雄本人の証言を参考にそれぞれ考察してきたが、いまだ不鮮明な点が残る。そこで、第三章では、彼の作品を対象にし、先行研究や本人のエッセイからだけでは汲み取れない日本語の選択の理由を探っていく。

第三章　小説検証

リービ英雄の作品の主人公は本人と同一視される傾向がある。本論文もそうした見方の妥当性を肯い、小説の主人公たちの描写を見ていくことで、リービ英雄の日本語の選択理由をみていきたい。

本章では、リービ英雄が執筆した小説の中でも、日本との関わりが濃く描写されていると思われる二作品を取り上げて、それらの内容を分析していく。

第一節　『星条旗の聞こえない部屋』

『星条旗の聞こえない部屋』の評価としては、〈英語を「母語」とする者が日本語で書いた小説という新しさとともに、日本語で構築された世界を、外部の視点から、日本語で突き抜けようとしている点にその衝撃力を秘めていた〉と評されている[14]。つまり、マイノリティー作家が集中して登場した一九九〇年前後の時代性を多分に帯びた、アメリカ国籍の作家が出現したこと自体と、在日マイノリティーの問題を考慮しない戦後日本の国民思想が、その正当性にゆさぶりをかけられ始める直前の時代を舞台に、日本におけるアメリカ人の問題を描いた内容においても、『星条旗の聞こえない部屋』は歴史的な意味を持っているとされた。

この作品と、本人の経歴と比べてみても同じような体験をしている。リービ英雄の父の仕事の関係で少年時代を横浜のアメリカ領事館で暮らしていた。その頃家出を繰り返し、新宿に行きおもしろく思ったという。日本文学に興味を持ったのも、この頃からである。

また、この作品からは一つ目の理由と二つ目の理由が見られる。よっ

て、その場面を取りだして考察していきたい。

①日本語の感覚的魅力・日本語への共感

一つ目の理由の要因は、人間関係と書き言葉であった。中でも人間関係は、この小説における安藤が体現している。リービ英雄が日本人の仲間と集まって会話をした体験が、安藤に連れられて、彼の部屋や東京の街を歩きながら、日本語の世界に導かれている様子と重なる。また、書き言葉については次のように描写されている。

ひらがなを書いていると、ベン自身も不思議な気持ちになった。ベンがはじめて日本語というものを意識したのは、八つだったか九つだったか、台中の家で元の家主が床の間の隅に残した古い書物を拾って、どっしりした漢字と漢字の間に「の」というのたくった不均整の異物がはさまれているのを見つけた日だった。（略）黄ばんだページを右から左へと、「の」と「は」と「む」と「る」、漢字の森に戯れている蝶の形をしたひらがなを魅惑された思いでずっとたどっていたのが記憶に残っていた。

この場面は幼いころを回想する場面であり、前章で三木氏が日本語に魅かれた理由のもとになっていると推察した台湾での原体験である。本作品にも表現されているところからも、リービ英雄にとって、幼い頃に見たひらがなのかたちというのは、彼の感性に響いたものだったのだろう。

②日本・日本語の性質への興味・批判

リービ英雄自身が度々遭ってきたであろう差別的な待遇については、この小説内で「ますむら」という人物に日本人を代表させ、当時の日本人の拒絶の態度を示しているとみられる。そしてまた、そんな態度に抗っている主人公が描写されている。

「俺はアメリカがきらいだ」と言った。（略）

「ぼくもあまり好きじゃない」

とベンは答えた。

「ますむら」がにらんでいる制服の白い上着は、ベンの胴をぴしっと包んで、その圧力感は心地よい。ほら、ますむらさん、見て下さい、ぼくはあなたと同じになったじゃないですか。

（略）

ますむらさん、あなたになってやるぞ。

続いては、この作品の核となっている人間関係である、父親の発言を引用する。

「お前は東京であれだけ勉強しているくせに、まだ日本の常識が分かっていない」

（略）

「お前がやつらのことばをいくら喋れるようになったとしても、結局やつらの目には、ろくに喋れないし、喋ろうと思ったこともない私とまったく同じだ。たとえお前が皇居前広場へ行って、完璧な日本語で『天皇陛下万歳』と叫んでセップクをしたとしても、お前はやつらのひとりにはなれない」

これは、父親から日本への憧れを持つベンに対して釘を指す場面である。このように、日本側からだけではなく、身内の人間にも日本への越境を否定される。これらの場面は二つ目の理由に対応している。

しかし、この作品では、この引用場面などから分かる父親との対立は、度々注目を受け論じられていることであり、単なる日本・日本語の体質への批判に終わらない。というよりも、その対立構造こそが、小説内容において最も注目される関係性である。つまり、この部分は、人間関係が要因であった、一つ目の理由にもかかっているのである。そこでもう一度一つ目の理由に戻し、次からは、小説にみられる、一つ目の理由を成している人間関係に主軸をおいてみていく。例えばクリーマン氏は

「星条旗が聞こえない部屋」はひとりの息子が、どのようにして父の中華主義的で理性的な漢字の世界を拒絶し、あえて官能的なひらがなの世界を選択する描いた物語として読むことができよう。(15)

と分析している。この分析は、父親との対立から、父親を漢字の世界に見立て、その反対の立場にある平仮名に魅かれたという説を唱えていることから、リービ英雄がなぜ平仮名に感性的に魅かれていったのかを説明している。このように、日本語の選択理由が、一見、説明不可能な感性的問題として説明が終わってしまうところを、周囲の人間関係を交えて考察すると、更なる考察が可能ということが分かる。そこで、書き言葉自体の芸術的な魅力による要因は別とし、ここからは研究の余地がある、小説内でみられる人間関係を中心に進めていきたい。

また、創作合評「星条旗の聞こえない部屋」で川村湊氏に〈父親に対する反感というか、反発みたいなものがあって、それが「日本」へ向かう一つのバネになっているわけですね。〉(16)という意見がある通り、この作品からは、父親との対立が原因となって他文化に傾倒していく構造を読み取ることができる。しかし、それは秋山駿、岡松和夫、井口時男「創作合評　新世界へ」にみられる次のような意見を生んだ。

井口　二十年後に書いている作者の意識の中ではどうなんだろうか。十七歳のときともっと違ったものがみえているはずなんだけれども、それをストレートに出さないために、何か自己規制しているのかな、そんなふうにも思いました。(17)

父親対自分という構図は、作中に綺麗に、わかりやすく提示されているために、それだけではない何かがあるのではないかと推察されるのである。そこで、父親以外の理由を探していくために、母親との関係性もみていくことにする。

次の場面は、ベンの回想で、アメリカに住んでいた時代のものである。ベンが外から帰ってきた時に、自分の家の前に止まっている救急車を見つけた。

母は確信している口調で神経衰弱の口ぐせを言い出す。

「私は正常ですよ」

前の白衣が黙って奥の寝室に入り、母の腕を握ろうとする。

「私は正常だ。ジェーコブを捉まえて！」とベンの父の名前を叫びだす。

（略）

「私は犠牲者でしょう。私じゃなくて、ジェーコブを捉まえて！」

白衣は二人とも、母の「議論」に対して、いつも笑い顔で答えるのだった。「犠牲者で敗北者だからこそお前が異常だ。こんなざまになっているお前の方が異常に決まっている」といわぬばかりの、笑い声とやわらかい口調をくずさず、鎮静剤の注射に備えて、前の白衣が母の袖を捲りはじめる。

当時十三歳のベンの前で繰り広げられるこのような光景は、彼にとって大きな影響を与えたと考えられる。駆けつけた医師達の表情から、その冷たい内心を想像するベンには、彼らに投影した自身の気持ちが少なくともあっただろう。この場面は、父親との関係性と比べると、構図で表せるような徹底した書き方をしていない。そのためか、この母親との関係性が、着目されることは少なかった。

さて、このような自分と近い人たちとの関係がうまく構築できないベンは、自身の気持ちとどのように向き合うかが問題になってくる。

貴蘭の息子であり、自分の弟である少年の手を握り、ベンは父を殺したかった。その欲望が、（略）脳裏を掠めて、忽ち胸に熱くくすぶる恥と変わった。その恥を……次の露店からすでに聞こえてくる「ハロー」というとろけるような女学生の声に、息がつまる思いがした……まわりの誰かに伝えて、誰かに叫びたかった。

まわりはみんな日本人だった。

この場面を、〈ベンは父を殺したかった〉という直接的な表現からも分かるように父親との対立として読むことは可能である。しかし、その一方で着目すべきは、その後の誰かに伝えたい、という気持ちが起こっている点である。そして最後に〈まわりはみんな日本人だった〉という象徴的な一文がみられる。ここから、父親あるいは一緒に住んでいる再婚相手の家族への反感や、恥ずかしさという気持ちを誰かに伝えたい、しかしその時まわりにいるのは外国人である日本人であった為に、日本語を勉強するようになるという流れがみえる。

第二節　「国民のうた」

内容としては、この小説から読み取れることは母親と弟との確執である。『星条旗の聞こえない部屋』でみられたような、評論家や本人の考察で得られた三つの理由は更に不明慮となり、一つ目の理由として感覚的理由である、母親と弟との人間関係が主軸としてみられることになる。主人公の生き方に対して、非難する母と、疎ましい弟との息苦しい関係が描写され、彼らの言動に居た堪れなくなるという場面も多い。よって、父親との対立の他に、母親と弟との確執が、リービ英雄が自分の家族に対して逃げたいと思うきっかけを十分に与えているということが、読み取れるのではないかと考えられる。因みにリービ英雄自身も、この主人公と同じように知的障害者の弟がいて、アメリカで暮らしていたという経歴を持つ。

まずは、久しぶりにアメリカに「行った」主人公と、母親と弟が、リビングに集う場面である。簡単な英語で繰り返し尋ねてくる弟に主人公は閉口し、そんな様子に母親が口出しをする。

「Take to him!」

やがてかれは英語で、母に答えた。

「I'm not his father」と。

「father,father」と言いだし、「tomorrow?」と興奮した口調の弟の声と、急に泣きだした母のすすり泣きの声が小さなダイニング・コーナーを満たした。

（略）泣き顔となった母の口から「私たちから逃げるために日本へ行ってしまったんでしょう」と次に必ず来る英語の台詞を先取りするようにかれの頭の中で「帰りたい」という日本語が鳴り響いた。

（略）

「かえりたい」という日本語が、意味をもつ以前に、まずはぬくもりのある音の連続としてかれの頭に響いた。毎年、こういうとき、「かえりたい」、「かえれる」という音の響きがかれにとって唯一の救いとなっていた。

彼は愛情と義務感に負けて毎年アメリカに行くが、喧嘩を回避できずに疲弊し、日本を心の拠り所にしているのである。次は、右に続く母親の反撃の場面である。

「いくら日本人といっしょにいても、けっきょくは死ぬまで外人、として扱われるでしょう」

母はとつぜん、そんなことを言った。

「A gaijin until the day you die」（略）

「そんなことばは実際に日本の中に生きたことのない人には口にする資格はない！」（略）

「Japanese!」と弟がまた口をはさんだ。

「そうだ、お兄さんは自分のことを Japanese だと思いこんでいる。だけど、本物の Japanese からは一生、gaijin としてしか見られない」

母は Japanese を言ったときも gaijin を言ったときも、その二つがまったく等価であるように、ちょうど同じ程度の軽蔑をもらしていた。

「お兄さんは、わたしたちから逃げようとして、けっきょく別の地獄に陥ってしまった、ハハハ」

この場面から分かるのは、やはり母親との確執からも強い影響を受けている可能性があることだ。彼が、日本人になることに対して、〈けっきょく死ぬまで外人〉として扱われると、『星条旗の聞こえない部屋』で父親が〈お前はやつらのひとりにはなれない〉と言っているのと同じように否定をし、かつ、自分達のいるアメリカに寄りつこうとしない彼が、日本にも受け入れられず行き場を無くしてもがいている様を、〈別の地獄に陥ってしまった〉と強烈に言い表している。アメリカの家庭にも、日本にも居場所を見つけられない主人公像が浮かび上がる。

次は、三木氏がアメリカに距離を取らせる一因となっていると指摘している、台湾での原体験を、この作品でも回想している場面があるので引用する。まずは、父親が主人公に生まれてきた弟が知的障害者であったことを告げた場面である。

「弟は」と父がさらに言いかけたとき、父の口調には抑えきれない失望がもれているように、かれは感づいた。「弟は一生、人と会話するとか、学校へ行くとか、そういうことはできないだろう」

（略）

父は、弟の誕生に恥を感じている、とかれはそのときはじめて気がついた。

恥を感じている父の前にいることがいやで、かれは何かの口実を言って、父の書斎を出た。

更に、この場面に続く部分で、弟がやって来てから父親が母親と会話をすることが少なくなったと描写され、家族に亀裂が生じ始めていることが分かる。次の場面は主人公が家で「支那の夜」という日本のレコードを聞く場面で弟がレコードの音声を真似しているところである。

toh! no! ah ka rih!

庭からの光に包まれた弟の顔に、かれはじっと見入った。見入っているうちに、恥のようなものが胸にこみ上げてきた。そのような恥をかれはそのときはじめて感じた。自閉的な快楽の他には表情のかけらすらうかがえない顔の弟が、自分と「日本人」の調和感を破壊するためにこの部屋にいる、と思って、かれは思わず、

Shut up!

と声を怒らせた。

父親に続き、主人公も弟に対して恥の気持ちを持つようになるのである。また、夜中に弟が発作を起こした様子を見た後の心情は次のようであった。

脳の中から強烈な勢いで何かがこみあげているのを感じた。涙ではなかった。今見た光景を、話の通じる誰かに伝えたい、という願望にかられた。

「日本人（ヒヤンレン）」にもこのようなことがあったのか、と思いながら、長い縁側の冷たい黒い板を一枚ずつ裸足の下で感じ、奥のタタミ部屋へゆっくりと向かった。

〈誰かに伝えたい〉という願望の〈誰か〉は、日本人向けの家屋に住み、日本人に対して思いを馳せているところからも、今後彼が伝えたい対象が日本人になることを示唆している。また、この時は居た父親は、この後離婚をし、母親と弟と彼を残し去ることになる。弟の存在が、父親が家から遠ざかる一因となったのである。

続いてアメリカでの一場面。母親と弟と主人公の三人でバージニア州に引っ越ししてから、家にお客を招く場面である。客人と弟が挨拶をし終えた直後、弟は客人の前で失禁してしまう。

「立小便もオリエンタル同然だね」とジョークをささやく役人の声がして、それを受けてくすくす笑う女の声も沈黙の中で、かれの耳に伝わった。

かれは十二歳だった。息がつまるほどの恥ずかしさにかられて、リビング・ルームから玄関のドアを押し開けて、外へ、どこかへ逃げたくなった。

また台湾での回想の時にも、母親が必死に弟を躾けようとしているところを、女の使用人にうっすらと笑われる場面を見て三十年間忘れられずにいる。彼にとって弟に関する恥の感情を伴う記憶は強烈なのである。

最後にアメリカに引っ越して一カ月ほど経った少年期の主人公が、弟とともに出かけ面倒をみている場面である。川辺に危なっかしく立つ弟を見て次のように想像する。

弟のいない世界を一瞬、かれは想像してみた。一つの思いがかれの脳の裏で生まれて、抑えても抑えてもついにことばをなした。

そうなったらぼくは自分の家に帰れる。

ついに主人公は、弟が居なくなることを想像する。そして彼が居なくなったら〈自分の家に帰れる〉としているところから、彼は〈自分の家〉は既に失い、その原因が障害者の弟であると考えているのが分かる。

この時の主人公は日本に対して現在の主人公ほど深く関わっていなかった。その為、もともと主人公が帰れる〈家〉だと認識していたのは、台湾での日本人家屋とそこにあった弟のいなかった家庭だったのだと推察される。それを失って現在は、アメリカではないどこかを求めて、日本へと逃げていったのである。そのくらい、弟の存在は重く、主人公の人生に影響を与えたのである。

第三章　結論

リービ英雄が「なぜ日本語を選び、執筆するのか」という疑問には、いくつもの答えが挙がってくる。およそそれらは三つに分けられ、一つ目は日本語の感覚的魅力と共感、二つ目は、日本・日本語の性質の批判、三つ目は文学的意義である。しかし、それらはどれかが不正解というわけではなく、リービ英雄の発言や、小説、文学界からの評価などを分析することで、確かに検証できる。つまり、彼の理由はそれだけ複合的で時系列を伴う理由だと捉えることができる。

これらの理由は、一つ目から二つ目、三つ目の順に繋がり、リービ英雄の日本との関わり方によって追加されていくものである。まず、一つ目の日本語の感覚的魅力と共感から、日本語への興味へと繋がり、日本文学に触れる。そして日本で生活しているうちに、日本人から拒まれたことによって日本・日本語の性質批判という二つ目の理由が生まれ、その反骨心で日本語研究を行い研究者・翻訳家へとなる。そして更に日本語と深い関わりを求め、小説家へと転身していき、周囲の評価と共に自身の文学的意義を見出し、それも三つ目の執筆理由としたのである。

一つ目の日本語への感覚的魅力と共感という理由の要因は更に二つ挙げられ、一つは人間関係であり、もう一つは日本語の文字そのものに対する興味である。そこで、まだ考察の余地がある人間関係についてみていくと、従来論じられてきた、父親からの逃亡から、日本への親近感が生まれた、という説に加え、母親と弟との関係性もその要因として捉えることができた。それは、リービ英雄の小説の特徴が私小説であるところから、小説内に見られる家族関係をみていくことによって、リービ英

雄本人に還元してみることができるからである。

そしてその結果、母親と弟との関係が、父親との関係に並んで主人公に影響しているものだということが分かった。また作品を通して彼ら家族に対して恥という共通の感情を持っていることも検証できた。これによって、リービ英雄の様々に語られる、日本語の選択理由と日本文学の執筆理由が、父親だけではない、母親と弟も含めた、家族に対する、恥ずかしさからの逃避から生まれていることが分かり、それがリービ英雄の日本語を選択した最初の要因であったといえるだろう。

注

（1）フェイ・クリーマン「言葉の越境者リービ英雄」（神田由美子・髙橋龍夫編『渡航する作家たち』翰林書房、二〇一二年四月）参照

（2）笹沼俊暁『リービ英雄　〈鄙〉の言葉としての日本語』（論創社、二〇一一年十二月）

（3）リービ英雄、佐藤洋二郎、富岡幸一郎、西部邁「特別座談会　言葉における普遍と特殊」（『発言者』二〇〇一年四月）

（4）姜尚中・リービ英雄「在日文学が広く読まれるためには言葉の力が必要だ」（『それぞれの韓国そして朝鮮　姜尚中対談集』角川学芸出版、二〇〇七年十二月）

（5）宮田文久「リービ英雄『千々にくだけて』を読む――「越境文学」の可能性――」（『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』二〇一二年七月）

（6）小島信夫、三木卓、川村湊「創作合評　星条旗の聞こえない部屋」（『群像』一九八七年四月）

（7）田久保英夫、江藤淳、富岡幸一郎「創作合評　天安門」（『群像』一九九六年十一月）

（8）絓秀実、川村湊、大杉重男「創作合評　満州エクスプレス」（『群像』一九九六年二月）

（9）注（3）に同じ

（10）三木卓、久間十義、奥泉光「創作合評　蚊と蝿のダンス」（『群像』二〇〇一年四月）

（11）注（2）に同じ

（12）注（1）に同じ

（13）注（5）に同じ

（14）永岡杜人「言語についての小説――リービ英雄論」（『群像』二〇〇九年六月）
（15）注（1）に同じ
（16）注（6）に同じ
（17）秋山駿、岡松和夫、井口時男「創作合評　新世界へ」（『群像』一九八九年十一月）

リービ英雄テキスト

『日本語の勝利』（講談社、一九九二年十一月）
『アイデンティティーズ』（講談社、一九九七年五月）
「国民のうた」（『群像』一九九七年十一月）
『星条旗の聞こえない部屋』（講談社、二〇〇四年九月）
『日本語を書く部屋』（岩波書店、二〇〇一年一月）
『越境の声』（岩波書店、二〇〇七年十一月）
『我的日本語』（筑摩選書、二〇一〇年十月）